

波の歓迎

イーシャ・サーデサイによる再話

レアーは、波が岸へと巻き崩れるのを見ながら、水辺に座っていました。それらは砂浜にたどり着く頃には小さくなり、ほとんど表面の起伏もなくなっていました。しかし、その向こうの青い大海原では、それらはより大きく、より力強いのです。レアーは目を閉じて、遠くにあるそれらの偉大な波を想像しました——それらがどのように激しく揺れ動き、急上昇し、空一面にあふれ出るのかを。

レアーは息を吐きました。彼女はダンサーであり、彼女の技能には深い熟達と直感力がありました。彼女が一人だけで踊る時、あるいは彼女の先生と二人きりの時、彼女ができることには限界がないように見えました。彼女は部屋中を旋回し、心の内側で奏でられるどんなメロディーにも溶け込むのでした。彼女の動きには、強さと優しさ、生々しい力と洗練された優美さのバランスが、絶えず変化していました。

しかし、彼女が舞台に上がり、10 人、20 人、あるいは——彼女が考えるだに身震いしてしまう——何百人もの人々の前に立つと、何かが変わってしまうのでした。突然、彼女はすべての人の目が自分に向いているのを意識し、彼らが自分をどう考えているのかを想像し、広大な洞窟のような舞台の上でたった一人、彼らが自分を見て感じているに違いないであろう事柄の物語を作ってしまうのです。人々の凝視は彼女にとって現実の重りのように感じられ、彼女の肩や手足にのし掛かりました。そして踊るためにその同じ足を持ち上げようとする、稽古の時の動きが全くできなくなってしまうのでした。かつて大気の粒子の中で自在に操れたリズムが、突然手の届かないところに行ってしまう。跡形もなく、消えてしまうのでした。

水が岸边にひたひたと打ち寄せました。彼女が住んでいたこの人里離れた沿岸地域では、たくさんの貝殻や鉱物でこすられたサンゴの痕跡で、砂はピンク色を帯びていました。

その時、彼女の後ろのどこかから、声が聞こえました。

「レアー？ あなたなの？」

レアーが振り向くと、先生が彼女の方に歩いて来るのが見えました。この先生は類いまれな優雅さと品格のある女性で、身のこなしは堂々として威厳があり、歩く姿は水の流れのようでした。

「何を考えているの？」と、先生は近づきながら尋ねました。

レアーはため息をつきました。

「できないんです」と、彼女は言いました。「人の前で踊ることができません。私は絶対できないだろうと思い始めています」

「どうしてそう思うの？」と、先生は尋ねました。

「何度も何度も何度も、起こっているからです」と、レアーは言いました。「踊ろうと舞台に上がるたびに、足の運び方が分からなくなり、自分のステップを忘れてしまうのです」

先生は水を見詰めました。

「あなたが忘れてるのはそれ？」と、彼女は静かに言いました。「ステップ？」

先生は振り返り、困惑の表情がレアーの顔に浮かんでいるのを見ました。「恐らく、うまくいかなかったことをくよくよ考えるのではなく」と、先生は言いました。「他のところに注意を向けるといいのではないかしら」

「他のところ？」 レアーは繰り返しました。「でも——どこに？ 私が考えることができるのは、舞台に立つとどれだけ緊張するかだけです」

「あなたの名前はレアーよね」と、先生は言いました。「それはどういう意味？」

「それは…波という意味です」と、レアーは答えました。「大海原の偉大な波のような」

「そうね」と、先生は言いました。「偉大な波。そのことを考えてみたらどうかしら」。彼女はレアーの肩をぎゅっと抱き締め、そして去っていきました。

レアーは、先生がたった今言ったことを熟考しました。

「私の名前」。彼女は考えました。「波。偉大な波」

彼女は目を閉じて、慣れ親しんだ楽な呼吸の流れに落ち着いていきました。彼女はそのリズムが、波が上がっては落ち、柔らかく碎けるさまに、いかにゆっくりと同調していくかに気づきました。「私は波」と、彼女は考えました。「偉大な波」

レアーは、その言葉を心の中で繰り返し始めました。「私は波、私は波、私は偉大な波」。時々、彼女のマインドはさまよい、舞台のイメージが再び現れました。あるいは、皆の目が彼女に注がれている感覚を思い出して、肌がヒリヒリし始め、針金が彼女の肉の下で交差し、これは——

自分は——安全ではないと告げました。そのような時、彼女は自分の呼吸に戻りました。名前に戻りました。自分の名前に。

「私は波。私は偉大な波」

やがて、彼女は目の奥で、それらの波を、最初はさざ波、そして次に大波を見始めました。それらは大きく、急降下しながら戯れてもいて、水は自ら弧を描くたびに、それが岸に向かって崩れ落ちるたびに歓喜していました。

ますます、水はレアーのマインドのサンゴ色の砂を巻き上げ——ついに、必然的に、偉大な波が彼女に向かって来ました。それらは慈悲とどう猛さを持って彼女に向かい、彼女の存在を浄化し、魂をなだめ、運命のいくらかのねじれや決まったやり方へのいくばくかの頑固な執着によって、そこに積もった数多くの生涯のちりを洗い流しました。

偉大な愛、それも彼女の所にやって来ました——そして初めて、彼女はそれが来るままにしました。うねる愛の波また波、太陽の光にきらめく波頭、その下の全世界。それらの波は子守歌のように、彼女の呼吸に合わせて緩やかにうねりました。彼女のマインドは穏やかでした。彼女の心——彼女はそれを感じることができたのです！それは彼女の胸の中で大きく明るく輝きを放ち、一つ一つの鼓動が彼女の存在を通して次々に温かさを送りました。どうしてこれまでそれを見逃していたのでしょうか？

そして、空間を超えたこの空間では、時間の外のこの時間では、彼女は何も証明する必要はありませんでした。何かである必要はありませんでした。彼女は、今、この瞬間に生きているという自分自身の物語以外の物語は、必要ありませんでした。それはただ彼女であり、この無限の水であり、そして彼女がこの無限の水だということでした。彼女はそれ、彼女は「それ」でした。彼女は液状の太陽でした。

レアーは目を開けました。彼女は、身体はいまだ面前で浮遊していながらも、しっかりと自らの意思で、その場から立ち上がりました。もうすぐ時間です。

彼女は劇場に向かって勢いよく歩き、そこに着くと、舞台に臨みました。人々——観客——が集まっていました。彼らも時が来たことを知っていたのです。

レアーが舞台を見た時、彼女に見えたのは光だけでした。それは上から輝き、下から照らし上げ、辺り一面をきらめかせていました。レアーは髪を後ろにまとめ、ダンサーの足首飾りを素早く身に着けました。彼女は深く息を吸い込み、そしてそれから——ためらうことなく、抑制なしに、自分は何のために生まれて来たのか、それは自分にとってどんな意味があるのかという、ようやく手に入れた理解と共に——光の中へ飛び込みました。天国かと思えるようなどこから、音楽家たちが演奏を始めました。

レアーの両腕は頭上へと滑らかに動きました。彼女の手のひらは曲線を描いて開き、閉じ、また開きました。彼女の両足は床の至る所で浮き上がりました。いまだ耳の中にある水の音と共に、自分の中で碎ける愛の波と共に、彼女は踊りました。



© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。

この物語は禅宗の古典的な公案から発想を得ています。